

十八世紀英国における異国風牧歌

海老澤 豊

十八世紀の英国では、ウィリアム・コリンズが『ペルシア牧歌集』(1742)を出版して以来、(1) トマス・ウォートンの『ドイツ牧歌集』(1745)を始めとして、(2) 中東やインド、アフリカなどを舞台にした「異国風牧歌」が次々と書かれるようになった。本稿で取り上げる作品だけを挙げても、トマス・チャタンの「アフリカ牧歌」(1770)、ウィリアム・ジョーンズの「ソリマ、アラビア牧歌」(1772)、アイルズ・アーウィンの『東方牧歌集』(1780)、エドワード・ラシュトンの『西インド諸島の牧歌集』(1787)、ヒュー・マリガンの「東洋風牧歌」(1788)、トマス・アトキンソンの『ヒバルニア牧歌集』(1791)、ロバート・サウジーの『ボタニー・ベイ牧歌集』(1794)などがある。

伝統的な「田園風牧歌」では、羊飼いたちが「心地よい場所」で実らぬ恋を嘆き、しばしば引き分けに終わる歌合戦に興じることが多い。しかし「異国風牧歌」では、戦争や侵略によって虐げられた者たちが、自らの不幸や絶望を切々と歌い上げる。もはや平和な牧歌世界は存在せず、運命が好転する兆しもほとんど見られない。英国の植民地支配に対する異議申し立ても強く前面に押し出される。一般的な牧歌の概念から大きく外れているのが、本稿で論じる「異国風牧歌」なのである。

ウェルギリウスの第一牧歌では、神と呼ばれる皇帝の恩恵を受けて安らかに暮らすティテュルスが、戦勝に貢献した退役軍人に土地を与える政策のために、土地と財産を没収されて流浪するメリボエウスに一夜の宿を提供する。またコリンズの第四牧歌では、タタールの侵略によって幸福な祖国を追われた羊飼いのアジブとセカンダーが夜半に山中を逃げまどう。この二篇は戦争の影響を描いた点で、牧歌としては異例の作品であるが、「異国風牧歌」がその延長線上にあることは明らかだ。

またジョーンズは「異国風牧歌」が「伝統的な牧歌の使い古されて擦り切れた描写から逃れようとして、作品の舞台を異国に求めざるをえなくなった詩人たちの最後の手段」であると指摘する。(3) 従来の「田園風牧歌」に飽き足らなくなった詩人たちが、作品の舞台を海浜や河川に置き換えた「漁夫牧歌」や、大都市ロンドン

で繰り広げられる「都会風牧歌」を生み出したことは、すでに別稿で論じた。(4) 「異国風牧歌」も牧歌に変革を求める詩人たちの試みのひとつであると言えよう。

さらに十八世紀にさまざまな旅行記や地誌の類が盛んに出版されたことも、「異国風牧歌」の流行に拍車をかけることになった。たとえばコリンズは『ペルシア牧歌集』を書くにあたって、トマス・サーモンの『現代史』を参考している。(5) サウジーの『ボタニー・ベイ牧歌集』は、クックの太平洋航海の副産物といってよい。詩人自らが東洋に赴いた時の経験を作品に利用している例も少なくない。ジョーンズは東洋学者としてインドに長く滞在したし、アーウィンもインドと英国を往復する生活を送った。本稿ではこれらの「異国風牧歌」をまとめて論じる。

(1) チャタトンのアフリカ牧歌

夭折の詩人トマス・チャタトンは、15世紀ブリストルの僧トマス・ロウリーが書いたと称する中世風の贋作『ロウリー詩篇』(1777)で知られる。彼の三篇の「アフリカ牧歌」は1770年に詩人が自殺する数ヶ月前に書かれたもので、「ヘッカルとガイラ」は2月、「ナルヴァとモレド」は5月、「ニカウの死」は6月にそれぞれ雑誌に掲載された。チャタトンがこれらを『アフリカ牧歌集』としてまとめる意図を持っていたかについては不明である。だが同年7月の手紙でチャタトンは最後の二篇について「詩歌と呼ぶだけの虚栄心を持てる作品」であると記しており、自信作であったことは間違いない。(6)

ブラッグは「アフリカ牧歌」が本質的にロマン主義的で、伝統的な牧歌から大きく乖離していると主張し、(7) マイヤースタインも「アフリカ牧歌」がコウルリッジの「クブラ・カーン」に大きな影響を与えていると指摘する。(8) 「アフリカ牧歌」は想像上のアフリカを舞台に、黒人の族長や司祭が歌うという設定になっており、これ自体はコリンズやウォートンの流れを汲むものであろう。ただしチャタトンは洪水伝説や宗教的舞踏などの描写に詩行の大半を費しており、本来は中心となるはずの主人公たちの物語は脇に追いやられているという印象が強い。サイファーが丹念に跡づけたように、(9) これらの描写の大半はアレキサンダー・キャトコットの『洪水に関する論考』の記述を敷衍したものである。(10)

「ヘッカルとガイラ」は伝統的な牧歌に近い形式で書かれており、状況を説明する詩人の語りで始まり、ヘッカルとガイラの対話に続いていく。舞台は荒れ狂うカイグラ川が洞窟に流れ込んで轟音を響かせ、遠くには恐ろしい岩山から白濁した急

流が落ちるさまを望む、アフリカのいづれも知れぬ海岸である。このような荒々しい描写が、古典牧歌の静けさや平和に満ちた田園風景から大きく外れていることは言うまでもない。真昼の焼けつくような責め苦の中で、二人の戦士が手足を投げ出して横たわっている。ひとは「ジャラの実り多い丘の長たるヘッカル」(11行)であり、もうひとは「戦の弓手の王たるガイラ」(15行)である。

彼らの一族は武装した白人の奴隷商人に襲われ、ヘッカルやガイラは応戦して敵を次々と倒していくが、結局は多くの仲間が奴隷として異国へ連れ去られてしまう。二人の戦士は奴隷商人の後を追うが、彼らは追われる狼よりも早く逃げ去り、その姿は目を凝らしても小さくなっていくばかりである。ヘッカルは追跡を断念しようと提案するが、ガイラの怒りは止まるところを知らない。

ヘッカル、我が復讐はなお血を求めている、
カイグラ川より大きな流れを飲み干すであろう。
この投槍は気高い諍いで何度も試したが、
奴らの武器の凄い雷鳴を脇に退ける。
流れ落ちる雨より早く私は矢を降り注ぎ、
震える心に旋風を巻き起こしてやるのだ。
だが今は私のもたつく足が復讐を拒む、
この目から投槍を投げられればよいのに。(25-32行)

歴戦の勇者であるガイラにとって、銃器で武装した白人との戦いは卑しいものでしかないが、彼は一族を守るために投槍や弓矢といった原始的な武器で立ち向かい、奴隷商人たちの心に恐怖を呼び起こす。ガイラが幾度も口にする「復讐」は「アフリカの灼熱の谷間の誇り」(51行)にして「我が安らぎの伴侶」(58行)たる愛妻カウナや子供たちが連れ去られたことに起因する。コリンズやウォートンの「戦争牧歌」の歌い手は、いずれも戦禍にみまわれて逃げ惑うだけの羊飼いであった。だがチャタトンの描くヘッカルやガイラは自ら武器を取って戦う勇士であり、このような人物が牧歌の主人公となることはきわめて異例である。

カウナが「漆黒の魅力に飾られ」(49行)、「極彩色の蛇のように巖かな」(54行)一方で、黒人を拉致して奴隷にする白人は「蒼白い者たち」(41行)や「百合のような顔色の者ども」(92行)と描写される。さらにガイラが斃した白人の骨は「銀白色になって」(39行)散らばり、恐怖に襲われた白人の顔は「病んだ銀色」(45行)に

染まる。テイラーはアフリカ人やその風景が「色彩の万華鏡」であり、チャタトンの色彩描写が黒と白の対立ではなく、色彩と無色の対立であると主張する。(11) これはコリンズが『ペルシア牧歌集』の序文で「我が国の気候は彼らの果実や香料にとって冷たすぎる」と述べたことに似ている。

ガイラはかつて森で「咆哮は恐ろしく、目は燃える炎」(64行)という虎に襲われた時に、弓矢で立ち向かった経験を持つ。傷を追った虎は荒地に逃げ込むが、ガイラは後を追ってとどめを刺し、毛皮を剥ぎ取ってカウナの寝床にしたのであった。アフリカに虎はいないと言っても意味のないことで、コリンズの第二牧歌でペルシアの砂漠にライオンの足跡があるのと同様に、虎やライオンは野生の恐怖を体現する存在なのである。この回想は野生の虎さえも打ち倒すガイラの勇猛さを表わす反面、多勢の白人から妻子を守れなかった彼の無念さにもつながっていく。

夜明けの山頂から遠ざかる帆船を認めたガイラは「あそこでカウナが無価値な者どもに混じり、ありふれた奴隷として憎むべき鎖を引きずる」(85-6行)と独白する。妻を特権化するガイラの心に差別意識が含まれていることは否定できないが、物語は「輝く剣や轟音を立てる煙も気にせず、ガイラと復讐が一撃に力を吹き込むであろう」(97-8行)という、白人の奴隷商人に対するガイラの強烈な復讐心の吐露で閉じられる。

「ナルヴァとモレド」ではチャルマの神に仕える女司祭が、司祭ナルヴァと世俗の娘モレドの成就されない恋を歌う。だが二人の悲恋が歌われるのは後半の40行あまりにすぎず、前半の60行余は戦士たちが逃走する処女(女司祭と同一人物)を追いかけるという、宗教的な追跡の儀式の描写に費やされている。戦士たちが太鼓の代わりに中空の貝を槍で叩いてリズムを奏でるなか、処女は背後を振り返りながら山頂へ逃げていく。

三度処女は微風に浮かんで泳ぐかのように、
神秘的な木々の木蔭で踊った。
暗い雲のように見わたす限り広がりつつ、
最初に生まれた戦と血の子らが追いかける。
ヘラジカのように早く彼らは平野にあふれる、
雨を滴らせながら疾走する雲のように早く。
若々しい牡鹿が何度も跳躍するように早く、
彼らは駆け巡り、前進しながら広がっていく。(23-30行)

山頂に達した戦士たちは「聖なるオーク」(40行)のまわりで、激しく体をよじりながら舞踊を繰り返し、その姿は「風に巻き上げられる木の葉」(42行)や「トッディダの海のやかましい渦」(59行)に喩えられる。やがて踊りに疲れた戦士たちは花々の上に腰を下ろし、女司祭が聖なる物語を語り始める。

モレドは神聖な中庭に小鹿を連れて行った時にナルヴァと出会い、互いに一目惚れする。ナルヴァは「チャルマの暗い安息の社のごとく長身で、ラダル・インカの船のように引き締まって堅固な」(83-4行)美男子であり、一方モレドの「顔はトグラの秘密の洞窟のように黒く、ホーホーいう毒蛇が住む苔のように柔らかい」(91-2行)と描かれる。「ホーホーいう」(hooting)は通例フクロウに冠される形容辞で、後に蛇の形容辞として無難な「シュウシュウいう」(hissing)に改善されたが、チャタトンの比喩表現はあまりにも突飛である。(12) 愛し合うナルヴァとモレドであったが、聖と俗の婚姻が許されるはずもなく、二人は抱き合いながら海に身を投じる。悲恋に関わる描写は不十分で、物語としてまったく体をなしていない。愛し合う男女の心中は牧歌よりもバラッドにふさわしい。

チャタトンは後にナルヴァとモレドが歌い交わす「アフリカの歌」を書いており、オラトリオを思わせる形式で、二人が互いに寄せる愛と欲望を主題にしている。冒頭ではモレドが「今や真赤な羽のコンゴウインコが、銀色の流れに沿って掠め飛ぶ」(7-8行)などとアフリカの美しい夜明けを歌い上げながら、「我が弓手」(13行)たるナルヴァを探し求める。続く「変調」と題された連では、目に歓喜を宿して近づいてくるナルヴァの姿がモレドの語りを通して描かれ、次の「変調」ではナルヴァが「汝の美しい肢体が、万事を望む胸を熱くし、激しい欲望に火をつける」(23-5行)とモレドへの情熱を吐露する。

最後の「彼」と題された連では、「荒涼として人の住まぬ荒地」(33行)でモレドを探し求めていたナルヴァが、天の神々の守護を得て彼女とめぐりあう。

その肌は冬の空のように黒く、
あの回る目は輝いてきらめき、
まるで毒のある蛇のようだ。
私を急がせよ、私を疾走させよ、
あの愛しい胸の上で死に、
自分をすっかり見捨てるのだ。(41-6行)

「ナルヴァとモレド」では身分の違いによって悲恋に終わった二人だが、「アフリカの歌」では一転して肉体的な欲望が強調されている。相変わらずチャタトンの比喩には違和感を覚えざるを得ないが、モレドの肌は「冬の空のように黒く」、ナルヴァの肌もまた「光沢のある果実のように黒い」とアフリカ人の美しさを讃えていることは注目してよいだろう。ナルヴァはある意味で魔性の女と言ってよい。

「アフリカ牧歌」の最後を飾る「ニカウの死」は、その大半がキャトコットの『洪水に関する論考』を韻文化することに費やされており、マイヤースタインは構成の弱さを指摘している。(13) 最初の20行は「ティベル河」(1行)の水が轟音を立てながら「ガイグラの山腹」(2行)を下り、やがて海に注ぐまでを描く。異国情緒を醸し出す「真紅のジャスミンが咲き乱れ、真赤なアロエが豊かな香りをふりまく。太陽が自らの熱で溶け出すと、悪臭を放つ虎が涼しい休息所を見つける」(15-8行)という詩行では、色彩あふれる熱帯の自然が提示される。

戦神ナラダと雷神ヴィシオンが戦ったという古代神話が語られた後に、ようやくナラダの末裔である「強靱なニカウ」(83行)の物語となる。かねてから神々はニカウの「友情と幸福と歓び」(100行)を壊そうとしてきたが失敗に終わり、ヴィシオンの息子で策略に長けたヴィカットが、ニカウの妹ニカに目をつける。ヴィカットの力によってニカの艶やかな表情にさらなる優美さが加えられると、ニカウの友ロレストは彼女に恋慕を抱く。ロレストに連れ去られたニカは、「朝日を浴びた美しいアロエのように」(114行)悲しみにやつれて死んでしまう。かくしてニカウは妹の復讐に立ち上がり、屈強な軍隊を率いてロレストの軍勢に迫る。戦闘の場面が描かれることのないまま、「ニカウが征服され、恋する男は倒れた」(118行)と結末だけが示され、ニカウは「悪臭を放つ矢(投槍)」(121行)で自らの心臓を貫いて死ぬ。

「ヘッカルとガイラ」は白人に妻子を奪われた怒り、「ナレヴァとモレド」は身分が異なるゆえに心中に終わる悲恋、「ニカウの死」は復讐に倒れる勇者の死をそれぞれ描いている。古典牧歌にも悲劇的な結末に終わる作品は少なくないが、チャタトンは古典の伝統に拘泥せず、自由に筆を進めている。三篇のなかで描かれる黒人たちは「高貴なる野蛮人」の系譜を引いているとも言えず、むしろ英雄詩で勲功を立てようとする武人や『オシアン』に登場する人物たちに近い。

(2) ジョーンズの東洋風牧歌

ウィリアム・ジョーンズは幼い頃から語学に秀でた才能を示し、ギリシア語、ラテン語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、ドイツ語に加えて、ペルシア語、アラビア語、ヘブライ語、トルコ語などを学んだばかりか、サンスクリットを理解する当時としては数少ない人物であった。彼は法律家としての職務を果たしながらも、ペルシア語の文法書を記し、インド・ヨーロッパ祖語の存在を示唆し、任地のベンガルでアジア協会を設立して多数の論文を発表するなど、当代一の東洋学者として知られた。(14)

ジョーンズの『主にアジア系言語からの翻訳で構成される詩集』(1772)は「運命の宮殿、インドの物語」、「七つの泉、東洋の寓話」、「ハーフィズのペルシアの歌」、「ペトラルカのオード」、「トルコ語の春に関するオード」など九篇を収め、巻末には「東方諸国の詩歌に関するエッセイ」と題された論文も掲載されている。(15) ジョーンズは序文で「新しい表現、新しいイメージ、新しい創案に富む」東方の文学作品を英国の読者に紹介することが、この『詩集』の目的であると述べている。

『クリティカル・レビュー』の書評は、東洋の手稿から翻訳したと称する架空の作品があまりにも多いので、「東洋の」と題された出版物は何であろうと、その信憑性を疑ってしまうと前置きした後で、東洋語に精通した人物の手によって、本物のアジアの詩歌が期待できると記している。(16) ジョーンズも『詩集』の序文で、このような疑念を払うために各作品について説明を施しており、また彼が前年にペルシア語の文法書を出版したことも、『詩集』の信憑性を高めるのに役立ったと思われる。

「ソリマ、アラビア牧歌」について、ジョーンズは序文で「アラビア語からの逐語訳ではないが、詩の登場人物、感情、描写は、本当にアラビアの詩人から取ったもの」であり、アラビア人の美德である「仁愛や歓待について書かれた詩」をつなぎ合わせて、一篇の作品に仕上げたと述べている。作品の舞台となるのは「旅人や巡礼の疲れを癒すために建てられた、心地よい庭園のあるキャラバンサライ(隊商宿)」であり、ソリマは宿の建設を命じたアラビアの王妃である。なおポーブは「救世主」を「ソリマのニンフ」への呼びかけで始めているが、「ソリマ」はギリシア語で「エルサレム」を指すという。(17)

作品の冒頭は異国情緒を喚起する地名や人名を織り込んだ詩行で始まる。

アデンの娘らよ、草地やあずまやや谷間で
かつて歌われたよりも高遠な物語に耳傾けよ。
アベラの微笑み、マイアのまなざし、
美が戯れて、愛はまどろんで横たわる。
アッザの髪の毛の芳しいヒアシンスは、
嬉しそうな夏の微風と戯れる。(1-6行)

ジョーンズは「東方諸国の詩歌について」で、「アデン」はエデンの東方訛りで「定住地」や「歓び、寛大、静けさ」を指し、灼熱のイエメンでは「木蔭の涼しさ、水の冷たさ」を想起させると記している。またアラビアの詩が「ヒンダ、マイア、ゼイネブ、アッザなどの名を持つ恋人との突然の別れを嘆き、馥郁たる茂みで戯れる気まぐれな小鹿に喩えながら、彼女の美しさを描く」ことから始まるともいう。このような「心地よい場所」は牧歌に欠かせない要素であり、ジョーンズは冒頭から英国の読者をアラビアの楽園へと誘うのである。

アマナの向こうに聳える美しい森の中に、ソリマがキャラバンサライを建てさせたのは、「傲慢な建物で夜毎の饗宴を重ねる」(31行)ためではない。失神しそうな客人を甘美な食事で励まし、疲弊した者を安らぐ寝椅子で眠りに誘い、冬の寒さで麻痺した旅人を暖めるためであった。王妃たるソリマは自ら先頭に立って、貧しい者や苦しむ者の話に耳を傾け、微笑みながら彼らに癒しの香油を塗り、憐れみの涙を注いだ。

ジョーンズは序文で「ソリマ」の下敷きにしたというアラビアの詩を引用し、自らの英訳も示している。「旅人や巡礼はよく知っている、空が暗くなり、北風が猛威をふるう時、母親が乳飲み子を見捨てる時、雲に湿り気がまったく見られない時、そなたが泉のごとく彼らに恵み深いことを、そなたが彼らの主たる支えであることを、そなたが彼らにとって昼には太陽であり、曇った夜には月であることを」。これをジョーンズは次のように「ソリマ」に組み込んだ。アラビアの詩からヒントを得たというにもかかわらず、この箇所に関してはアラビアの風土を感じさせる描写はほとんどない。

恐怖に凍えて、震える巡礼が道もない
砂漠や、枝の絡み合う森をさまよう時に、
覆いかぶさる闇がドラゴンの翼を広げ、

死の鳥たちが葬礼の弔歌を歌い、
蒼白い霧が恐ろしい微光を投じ、
風が吹くたびに震えさせる恐怖が唸る。
彼女は輝き出す光の流れで彼の闇を照らす、
昼には太陽として、夜には月光として。
彼女の天上の光線は震える木蔭を貫き、
彼の孤独な道に開花する花々を広げる。(69-78行)

この牧歌の主題は慈愛に満ちたソリマを称賛することにある。フランクリンは、慈善を目的とした協会で尽力したスペンサー伯爵夫人が、ソリマのモデルになった可能性を指摘する。(18) ジョーンズは1765年にスペンサー伯爵家の家庭教師として雇われ、1774年末の伯爵夫人宛て書簡で「あなたと知り合うという荣誉に与らなかつたら、ソリマが書かれることはなかったでしょう」と記している。(19) 翌年1月の返信で伯爵夫人は「私の性格とソリマの性格の類似」について言及し、ジョーンズが「美德と仁愛」に富んだ人物として彼女を称賛したことに満更でもない様子である。(20) またジョーンズが『詩集』第二版(1777)の献辞で、「これらの東洋風の作品、特にソリマの詩」を伯爵夫人に捧げていることも、彼女がモデルである証左となろう。(21)

またジョーンズはソリマが慈善を施す場面が、ポープが「ロスの男」を描いた詩行と似てしまうのを避けることは難しいと注に記している。これはポープの『倫理的エッセイ』でバサースト卿に宛てた第三書簡詩「富の効用について」の一節を指す。「ロス」はワイ川の畔にある町を指し、ポープは驕った貴族や宮廷を非難する一方で、私財を投げ打って慈善に身を捧げた「ロスの男」(ジョン・カール)を称賛する。(22)

貧しい者たちが群がる市の立つ場を見よ、
ロスの男は毎週パンを分配したのだ。
彼はあの清潔だが居丈高ではない救貧院を養う、
門には老齢と欠乏が微笑を浮かべて座っている。
持参金を得た娘たち、徒弟奉公に出た孤児たち、
働く若者たち、安らぐ老人たちは彼を賛美した。
病人はいるか。ロスの男は救いの手を差しのべ、

処方し、付き添い、薬を作り、そして与える。(263-70行)

ジョーンズは「似てしまう」と言っているが、「ソリマ」には「この森に來い、この生命が息づく空き地へ、友のない孤児たちよ、持参金のない娘たちよ」(45-6行)という詩行もあり、これはポープの表現を借用したものであろう。確かにジョーンズは東方の詩歌に見られる「新しい表現、新しいイメージ、新しい創案」を取り入れたかもしれないが、作詩においてはポープから小さくない影響を受けていると言えよう。

(3) アーウィンの『東方牧歌集』

アイルズ・アーウィンは東インド会社に雇われてインドで長く暮らした著述家で、紅海地域の旅行記で名を馳せた。(23) 彼の「ベデューカー、すなわち献身者」(1776)には「インド牧歌」という副題が付せられており、その主題は夫の死に際して妻と一緒に焼かれるというヒンドゥー教の風習(サティ、寡婦殉死)である。(24) アーウィンは序文で「婚姻の信義に対する称賛」が上流社会では笑いを誘うかもしれないと皮肉を交えながらも、「東方の美德と信仰の力」(1行)について歌う。

コロマンデルの海岸地域で狩猟をしていたリュコンは、森の中でブラフマンの一人団と遭遇する。彼らは15歳にも満たないうちに未亡人となったベデューカーを、寡婦殉死の行われる場所に連れて行くところであった。彼女の母親は若く美しい娘に「この残酷な風習が支配する場所」(第2巻77行)から逃げようと説得する。しかしベデューカーは「恥の多い人生を送ることに同意すれば、いかに希望や私の正直な名は失われるか」(第2巻141-2行)と母親の懇願を拒絶する。

さらにベデューカーは一部始終を見守っていたリュコンの姿に目を止め、寡婦殉死することを選んだのは自分であり、憐れみは必要ないと断言する。そればかりか彼女は「キリスト教徒の妻たちに異教徒の死を語れ、真似しなくとも嫉妬させるがいい」(第3巻52-3行)とまで言う。彼女の死を見届けたリュコンは「結婚の真理の輝かしい見本だ」(第3巻105行)として、ベデューカーの貞節と美德を称賛する。

『ロンドン・レビュー』は「この作品の教訓はヨーロッパの読者の心にほとんど作用しないだろう」と述べ、また『マンズリー・レビュー』は「この作品を牧歌と呼ぶ理由が理解できない。その種の詩はこのような恐ろしい行為を忌み嫌うものだ」と批判する。(25) 確かにベデューカーの純愛は牧歌に通じるものがあるかもしれない

が、寡婦殉死を「結婚の真理」と称賛し、英国の結婚生活を揶揄することは、必ずしも牧歌で描くべき主題ではあるまい。

アーウィンの『東方牧歌集』(1780)は「アラビア、エジプトおよびアジアとアフリカ地域を旅行した間に書かれた」という副題を持つ。(26) 彼は「広告」で、東方を題材にした詩歌が「実に多くの有能な筆」によって書かれてきたために、同種の作品で成功を収めることは難しいが、「遠国の情景に間際まで近づき、生活からスケッチし、奥地の情景で自然を描く」ことで独創性を得ることができたと述べている。

『東方牧歌集』に収められた四篇には、ポープに倣ったと思われる場所と時が明示されている。第一牧歌「アレクシス、すなわち旅行者」は、時が「朝」で場所は「アレキサンドリアの廃墟」という設定である。アレクシスは「戦争で解体され、無知によって損なわれた」(6行) 遺物を見て回り、今はなき古代ローマの栄光に思いを馳せる。クレオパトラへの愛を貫くために、アントニーは世界を放り出したが、二人の名声は忠実な恋人たちの関心を引くであろう。だが「傲慢なアウグストゥスは隷属する帝国を支配し、マントヴァの調べで永遠の命を得るがいい」(55-6行)とアレクシスは独白する。「マントヴァの調べ」がウェルギリウスを指すことは明らかだが、西洋牧歌の礎を築いたウェルギリウスを揶揄するのは、牧歌詩人としていかななものか。

第二牧歌「セリマ、すなわちギリシアの美女」は、時が「昼」で場所は「幸福なるアラビアの後宮」となる。海賊に拉致されてハーレムに売られたセリマは、魅力的な人柄のために「恋敵もないままに主の愛を独占した」(31行) が、求められない愛を軽蔑せずにはいられず、同輩たちの嫉妬にも晒されている。彼女は「奴隷としてトルコの海を切って進む」(103行) 恋人のクレオンを今も思いながらも、主人の求めに逆らうことはできない。

この城壁に囲まれた後宮は、芳しい香辛料の木が林立する河畔に建っており、その意味では「心地よい場所」とも言えるが、セリマはハーレムの女王という地位にありながらも、自由を求めて嘆息するばかりである。ただし他の女たちは後宮の暮らしに満足しているようにも思える。彼女たちにとって、ここは楽園に他ならない。

手前に見えるのは、美しさの輝きを誇りながら、
宦官の賞賛に耳を傾ける女性であった。
奥では、透き通った風呂が水鏡を提供し、
裸の女性が魅了されて潮の上に屈み込む。

手前では乙女が卑しい好色な欲望の調べに
合わせて豎琴を奏で、拍手を浴びている。
奥では数人が、物語られた恐怖に青ざめて、
妖精譚の摩訶不思議を吸収している。
各々が気まぐれに促されて、時を過ごし、
幻の喜びに手綱を緩めているのだ。
活動的な力をチェスに注いでいる者もあり、
残りは午睡で灼熱の時を紛らわせている。
アラビアのベリーが部屋中に輪を描き、
点灯された管から芳香が立ち昇っている。
快適なライムの果汁も欠けることはなく、
幸福な国を飾る珍しい果実もあふれていた。(49-66行)

異国情緒を香らせるという点においては、アーウィンが詩想を得たと思われるジョーンズの「ソリマ」を凌いでいると言えよう。

第三牧歌「ラマー、すなわちヒンドゥー教の僧侶」は、時が「夕暮れ」で場所は「コンジェブラムの仏塔」である。ヒンドゥー教の敬虔な僧侶ラマーは、仏塔（パゴダ）の尖塔の頂に立って、インドの将来を憂える。「残忍な略奪者」（51行）たるタタールの侵入によって国土は蹂躪され、海岸は「ムーア人の血」（69行）で汚され、「ルシタニア（スペイン）の者たち」（71行）や「オランダ人」（73行）もやって来た。今や彼らに代わって「あちらに傲慢なゴール（フランス）人、こちらに寛大な英国人」（78行）がしのぎを削っている。このようにラマーは祖国の危機を訴えると、塔から真逆様に飛び降りて「英国の王座に教訓を残す」（120行）のであった。全体としてはグレイの「詩仙」に想を得たものと考えられるが、これも牧歌と呼ぶべきか判断に苦しむ。

第四牧歌「逃亡者、すなわち捕囚」は、時が「夜」で場所は「チュニスの郊外」である。チュニスに囚われの身となったスペイン人のペレスとセバスチャンは、ガレー船の漕ぎ手として過酷な仕打ちに耐える日々を送っていたが、愛するマルシアとレオノーラと再会することを夢見ながら、小舟を盗んで大海原に乗り出す。一方で君主の宮殿では「歌と踊りと風呂と阿片の杯」（25行）が魂を虜にすると描写されるが、これは第二牧歌とほとんど変わらない。

『マンズリー・レビュー』第62号(1780)は、この『牧歌集』を評しながらも、「異

国風牧歌」全般にあてはまる欠点を明らかにしている。(27) まさに至言であろう。

詩人が以前に扱われた主題にこだわり、すでに知られた情景を描いている間は、まったく独創的な感情やイメージを紹介することは困難であろう。この困難さは詩歌において特に顕著である。よくあることだが、詩人たちは見たことのないものを描き、感じたことのないことを描こうと試みる。(中略) 残念ながら、我々の期待は少しも満たされない。彼が描いている登場人物や情景に特有の、あるいはそれらにふさわしい感情とイメージのどちらも認められない。

(4) ラシュトンとマリガンの異国風牧歌

エドワード・ラシュトンは、奴隷貿易の拠点のひとつであったリバプール出身の詩人で、失明したことから盲学校の設立に尽力するなど、社会改良家でもあった。匿名で出版された『西インド諸島の牧歌集』(1786)は、英国支配下のジャマイカで暴力や重労働に苦しむ黒人奴隷を主人公にした作品である。自らも西インド諸島で暮らした経験を持つラシュトンは、「広告」で英国人の「野蛮性」を非難し、これらの詩を書くに至った主たる動機は「人間性」であり、「哀れな者たちを不必要に苦しめる過度な懲罰を防ぐことに貢献できれば」幸いだと記している。(28)

時間が「朝」に設定された第一牧歌は、黒人奴隷のユンバとアドマの対話である。アドマの妻ヤローは赤子を背負って畑で働いていたが、暑さのために泣き出した幼児をかばって手を休めたかどで白人の監督に鞭打たれ、これを止めようとしたアドマは縛られて拷問を受ける。アドマは過酷な運命から逃れようと死を決意するが、ユンバは彼を励まして白人に対する復讐を誓う。

第二牧歌は第一牧歌と同日の「夕暮れ」に交わされるユンバとアドマの対話を描く。このような牧歌集で各々の牧歌は独立した設定を持つのが普通だが、同じ人物の登場する同じ物語が連続することは珍しい。また四篇の牧歌に朝、昼、夕、晩と一日の時間帯をそれぞれ割り振るのは、ポーブの『牧歌集』以来の伝統であるが、この順番をずらすことも通例にはない。

アドマが拷問を受けて命を落としたペドロの悲劇を語ると、ユンバは弱気なアドマに「犬のように白人の足を舐めろ」(42行)と吐き捨てるように言う。アドマは山に逃げて静かに暮らそうと持ちかけるが、ユンバは山には奴隷狩りをする種族が住んでおり、どこへ逃れたところで「苦しむ黒人は必ずや敵を見出す」(92行)とにべ

もない。アドマは自分の小屋は近くにあり、妻のヤローが米を用意してくれるから、一緒に行こうとユンバを誘う。これはウェルギリウスの第一牧歌で、悠々自適のティテュルスが流浪するメリボエウスに一夜の宿を提供する件の模倣である。しかしユンバはアドマの好意を断って、ひとりで白人を倒すために別れを告げる。

第三牧歌は「昼」で陽射しを避けてタマリンドの木蔭で休むコンゴとクアミナが、「残忍な貿易の種族」(54行)に拉致されてアフリカからジャマイカに連れてこられた不運を嘆く。クアミナの口から語られるのは、白人への復讐をもくろんだユンバが失敗して殺害されたこと、また老いて水汲みの仕事を割り当てられたアンゴラが、水をこぼしたために鞭打たれて死に追いやられたことである。コンゴは「青白い種族」(124行)にあらゆる呪いが降りかかることを祈願して、第三牧歌は終わる。

第四牧歌は真夜中にオレンジの森に潜んで、妻のクアムバを待つロアンゴの独白で語られる。白人監督に見初められたクアムバはロアンゴから引き離され、三日たっても夫のもとに姿を現わさない。ロアンゴはクアムバが「奴の贅沢な衣服や、快樂と休息のための羽毛のベッド」(45-6行)に魅惑されて、白人に身を任せているのではないかという疑念に苦しめられる。一方で自分が妻に提供できたのは「粗末なベッドと、床に敷いたマット、ヤムイモとプランテーン、泉から汲んだ水」(58-9行)だけと嘆く。かくして嫉妬と復讐に燃えるロアンゴはナイフを持って監督の小屋へ向かう。

「広告」で「実際の観察をもとにして描いた」と記しているように、ラシュトンは黒人奴隷の置かれた悲惨な境遇や過酷な労働、英国人の行う非人道的な拷問を赤裸々に描く。この『牧歌集』に頻出するのは、「鞭打ち」「血まみれの支配」「復讐」といった語で、英国人は「暴君」「悪党」「怪物」「虐殺者」などと呼称される。本稿で取り上げた詩人たちの牧歌に比べると、ラシュトンの視点はしっかりと一点を見据えており、奴隷貿易に反対する彼の意思は強固で混じりけがない。

しかし同時にラシュトンはジャマイカの自然の生態を描くことにも腐心しており、各牧歌の冒頭はいずれも動植物にあふれた風景描写に費やされている。例として第三牧歌から一節を引く。

羽ある種族は派手な羽毛をひけらかし、
輝く真昼に戯れて、羽ばたいている。
長い嘴をしてブーンと唸る種族は飛び回り、
花々がもっとも豊かな場所で体色を見せる。

目を地上に向けて、空中で巧みに釣合いを取り、
有能なコンドルは運命づけられた餌を求める。
海が波立っている上をペリカンが飛ぶ、
巨大な嘴と、見通す目を持っていて、
たまたま水上の借地人が飛ぶのを見ると、
真逆様に急降下して獲物を運び去る。
色とりどりの翼を広げて飛んでいると、
斑のあるトカゲは一足ごとに飛びのく。
牡牛は岸边に向かって重々しい荷車で
果汁の多い砂糖黍の豊かな産物を引きずる。
疲労した黒人たちは小屋に赴き、
枝を広げる木から僅かな食料を手に入れる。
時が過ぎ去り、ほら貝の響く音が聞こえ、
悲しい種族は日々の苦悩を再開する。(11-28行)

コンドルやペリカンが白人の寓意とも思われませんが、周囲の豊かな自然環境と、酷使され日々の糧も十分でない黒人奴隷が対比されていると読むべきかもしれない。だがラシュトンは『牧歌集』に21項目に及ぶ博物学的で長大な注を付しており、たとえば引用の最初に登場した「羽ある種族」については次のように説明される。

このハミングバードは、その美しさ、姿形、匂い、生態のすべてにおいて称赞に値する。この鳥は飛ぶ時に蜜蜂の羽音に似た音を発し（その名前はこれに由来する）、実際にはマルハナバチよりずっと大きいわけではない。あらゆる鳥の中で最も小さいが、最も美しい。首や翼の羽の色は虹の色を表わしている。なかには首の下が真赤なものもいて、最も美しい柘榴石をも凌ぐ。腹部や翼の付け根の色は輝く黄色である。腿はエメラルドのような緑色である。足と嘴は磨き上げた黒檀のように黒く、頭部は鮮やかな海緑色である。ハミングバードは飛ぶ時に大きな鳥よりも大きな羽音を立てる。旅人の顔先を飛ぶのが好きなようで、通り過ぎる際に小さな旋風のように旅人を驚かせる。舌は葦のように中空になっているが、小さな針ほども大きくはない。長い間空中で静止することができ、花の中に舌を突っ込んで、その汁を吸って生きている。この美しい生き物を捕まえる唯一の方法は、砂を投げつけてびっくりさせることである。だ

が砂を浴びせたり、他の方法を用いても、捕まるとみな死んでしまう。いかなる人間の技をもってしても、彼らに通常の食事を取らせることはできない。

牧歌にこのような注がつくことはきわめて異例である。ここで思い出されるのはジェイムズ・グレインジャーの『砂糖黍』(1764)である。(29) この作品は西インド諸島のセント・クリストファー島を舞台にした農耕詩で、グレインジャーは島の地形や風物や動植物について、詩行をはるかに超える膨大な注を付している。ラシュトンはこの先例に倣ったものと想像されるが、プリニウスのような好奇心に満ちた注釈は、奴隷制度に対する糾弾とは異なる方向を目指しているように思われてならない。

ラシュトンと同じリバプール出身の詩人にヒュー・マリガンがいるが、彼の経歴についてはほとんど分かっていない。彼の死に際してラシュトンが寄せたエレジーからは、世間に認められず、困窮の中で死んだと想像されるだけである。(30) マリガンの『主に奴隷制と圧制に関する詩集』(1788)は、奴隷解放運動の指導者ウィリアム・ウィルバーフォースに捧げられた政治的な詩集である。(31) その冒頭を飾る四篇の「異国風牧歌」は、それぞれアメリカ、インド、西アイルランド、ギニアを舞台にしており、やはりポープの『牧歌集』に倣って、朝、真昼、夕暮れ、真夜中という一日の時間帯が順に割り振られている。

第一牧歌「奴隷、アメリカ牧歌」は、ヴァージニアのプランテーションが舞台である。「鞭を高く振り上げよ、我が魂は拷問を軽蔑し、私は自由と故郷の草原を切望する」というリフレインに象徴されるように、黒人奴隷のアダラはアフリカで幸福に暮らしていた日々を懐古し、暴虐な白人の圧制に対する復讐を誓う。もっとも白人の中にも人道的な者はいて、ナーバルの農場では「棒で突く監督もなく、血の流れる枷も拘束せず、過酷な強制が高揚した魂を湿らすこともない」(83-4行)。しかしナーバルの草原には陽気に花が咲くが、アダラの草原は地と涙で湿っており、ナーバルの炉は冬にも陽気に燃えているが、アダラは嵐に向かって嘆くのみである。

第二牧歌「娘たち、アジア牧歌」では、インド北部ロヒラの王女ショウナと友人のアルヴィアが、英国軍の侵略を逃れて森の避難所を目指しながら歌い交わす。身内の男たちはすでに戦いで倒れ、聖なる神殿や王宮も略奪され破壊された。二人は天に救いを求めて祈りを捧げるが、「洞窟のそばで女たちは行き絶えて横たわり、凌辱と殺戮が勝者の道を跡づける」(159-60行)結果に終わる。

第三牧歌「牛飼いたち、ヨーロッパ牧歌」は、西アイルランドの岬でモラルとカ

リルの父子が歌い交わす作品で、四篇の中で伝統的な「田園風牧歌」に最も近い。かつては夕暮れになると羊飼いたちが集まって、笛に合わせて踊り、吟遊詩人が堅琴を奏でながらデー人の没落を歌ったものであった。しかし英国の支配下ですべてが変わり果て、「くねって水車場に続く道には苔が生し、ハンマーは沈黙し、機（はた）も静まっている」（83-4行）状態となった。モラルは徴兵されて20年間ヨーロッパ各地を転戦したが、スペインやロシアやドイツやイタリアで目にしたのは、いずれも領主に搾取される農民や羊飼いの姿であった。何ら希望を見出せぬまま、二人は「渦を巻く煙が歓迎の炉を示す」（162行）小屋へ退く。

第四牧歌「恋人たち、アフリカ牧歌」では、ギニア湾で英国の奴隷貿易船から辛くも逃げ出したブラとゼルマが、自分たちの苦難とアフリカの受難を語り合う。白人たちは最初こそ食料を求めて友好的に村に入ったが、夜になると家々に火をかけ、村人たちを拉致しようとした。武勇に優れたブラは侵略者たちを蹴散らす、ついに力尽きて白人の捕囚になってしまう。奴隷船の中では拷問が日常茶飯事で、悪疫のために黒人たちは疲弊していく。歌唱に優れていたセストロは舳先から海に飛び込んで逃亡を計るが、結局はまた捕われて拷問の末に命を落とす。ブラは仲間たちと夜に反乱を起こし、ゼルマとともに船尾から海に飛び込んで故郷の浜辺に達したのであった。

二人が語り合っているうちに、白人の船が甲板に松明を掲げて、再び近づいてくるのが見えた。そこで急に雷鳴が轟き、稲妻が疾走し、地震が起きて、船はばらばらになってしまう。ブラは「我らの傷ついた神々が彼らの悪しき計画を押しとどめる」（170行）と、完全に解放されたことを喜び、ゼルマとともに満足と平和が保証された遠い荒地へと旅立つ。

マリガンの四篇の牧歌は舞台こそ異なっているが、主題は共通して英国の植民地政策や奴隷貿易に対する異議申し立てであり、ラシュトンの牧歌と同工異曲と言って差し支えない。これらの作品は「異国風牧歌」というよりも「政治的牧歌」と呼んだほうがふさわしい。自らの経験に基づいてジャマイカの風物や自然を描写したラシュトンに比べると、マリガンの牧歌は地方色が薄く、描写の迫真性にも欠ける。マリガンも膨大な注を付しているが、その大半は奴隷解放を説く書物からの引用で占められており、借り物の牧歌という印象がすることは否めない。

(5) アトキンソンの『ヒベルニア牧歌集』

トマス・アトキンソンはダラム近郊に生まれた英国人であるが、幼い頃に父を失くしたために、僅かな遺産を相続する見込みを頼って母とともにアイルランド（ヒベルニア）に移住した。これまで見てきた「異国風牧歌」には、古典牧歌の影響がほとんど認められなかったが、アトキンソンの『ヒベルニア牧歌集』（1791）はウェルギリウスの牧歌に多くを負っており、古典の伝統を意識した真実な牧歌と言えよう。（32）四篇の牧歌に朝、昼、夕暮れ、夜という時間帯が割り振られているのは、これまで見てきた詩人たちの牧歌と同様である。

第一牧歌「コナー、すなわち農夫の不満」の冒頭は「異国風牧歌」には珍しく牧歌の伝統に触れている。

シシリアの歌が私の穏やかな詩神を目覚めさせる、
 イエルネの島よ、彼女の主題を拒絶するな。
 甘美な主題だ、ポープがすばらしい葦笛で奏で、
 コリンの空想が好み、輝けと教えたものだ。（1-4行）

「シシリアの歌」はテオクリトス、「イエルネ」はアイルランド、「コリン」はスペンサーを表わす。早朝のマンスターで農夫のコナーが羊を草地に追いたてながら、周囲の華やかな自然に目を投じるが、彼の心は一向に喜びを覚えない。アイルランドは「冷たい欠乏とひどい圧制」（37行）のために疲弊し、黄金に輝く豊かな小麦もすべて英国に運ばれ、母親は幼児が飢えて死ぬさまを見守り、天に復讐を祈る。各連の最後では「さらば、我が祖国よ、さらば、汝の情景はもはや私の悲しみを紛らわせない」というリフレインが繰り返され、コナーは「有能な農夫が働いて報われる」（82行）異国で暮らしたほうがましだと嘆く。ここにはウェルギリウスの第一牧歌におけるメリボエウスの嘆きが投影されている。

第二牧歌「フェリムとドーラン、すなわち賛美者」では、二人の羊飼いが真昼の暑さを避けてリフィー川沿いの木蔭に退き、ドーランがフェリムに歌うように求める。その歌の主題はウェルギリウスの第四牧歌「ポリオ」と同様に、将来に一人の王が現われると黄金時代が甦るといふものである。偉大な王はハイメンの媒酌によって魅力的な女王と結ばれ、アフリカでは奴隷が解放され、南の島には文明がもたらされ、アイルランドでは十分の一税が廃止され、血まみれの暴君による苦しみは

なくなり、農夫は他国に移民せずに豊かな収穫を享受する。

しかし王は「地の果てまでも広大な領土を広げ」(24行)、「彼の艦隊は泡立つ大海原を統括し」(45行)、「他の国々の上にイエルネの島は聳え立つ」(72行)という詩行に明らかなように、これは形を変えた帝国主義であり、確かに仁政と言えるかもしれないが、上からの支配には違いない。「風よ、遠くまで吹け、私の歌声を運べ、遙かな国々に私の歌を聞かせよ」というリフレインもどこか白々しい。

第三牧歌「パトリックとダーモット、すなわち移民者たち」は、ウェルギリウスの第一牧歌をアイルランドに移植した作品である。ダーモットは一日中働いた後で疲労して家路につく。しかし嵐のために彼の小屋は吹き飛ばされており、行き場を失った妻子は牧師館の前で寒さに震えていた。彼は「増長した守銭奴は妻子を戸口から追い出し、十分の一税の代わりに貧者に憐れみも示さない」(35-6行)と墮落した聖職者に怒りをぶつける。パトリックは「自由のあるところが我らの祖国となる」(64行)と断言して、ダーモットと一緒にフランスへ移民するように勧める。同意したダーモットに対して、パトリックは一夜の宿を提供しようと申し出る。

私と一緒に来れば、今晚は私の小屋を共有しよう、
君の妻や赤子と一緒に来て、心労を追放してしまえ。
柔らかい藁を敷いた地面に寝かせてやろう、
選りすぐりのジャガイモ、塩と水で食事だ、
それで我慢してくれ、だが葡萄酒の中で泳げるぞ。(91-2行)

これはウェルギリウスの第一牧歌で、奴隷の身分から解放されて悠々自適のティユルスが、異国へ流れていくメリボエウスに示した好意を模倣したものである。(33)

だが今晚、君が私と一緒に、この緑の葉の上で
休めればいいのだが。君に熟した果実を提供しよう、
粉をふいた栗も、たくさんの乳を搾ったチーズも。(79-81行)

ウェルギリウスの描くイタリアの貧しくとも滋養溢れる食事に比べて、パトリックの提供するアイルランドの食卓は何ともわびしい。しかしジャガイモによって多くのアイルランド人が大飢饉を生き延びたことも歴史的な事実であった。

第四牧歌「キャノンとディロン、すなわち絶望する羊飼い」では、真夜中の木蔭で二人の羊飼いが恋の嘆きを順番に歌う。まずキャノンがつれないノラへの想いを告白する。キャノンはゴシキヒワや蜜蜂や熟した果実を贈るが、ノラは少しも振り向いてはくれず、彼は絶望のあまりに岩山から川に飛び込んで苦悩を終わらせようと歌う。これはテオクリトスの第三歌やウェルギリウスの第八牧歌の主題となった「恋の嘆き」を敷衍したものにすぎない。

後半でディロンは婚礼の朝に急逝した婚約者エリンの死を嘆く。死因は明らかにされないが、結婚を祝う仲間たちに囲まれるなか、エリンはディロンの腕の中で突然崩れ落ちて息を引き取ったのである。ディロンはエリンの墓を前にして、自分も遠からず悲しみと苦悩のために死んで、仲よく並んで葬られるだろうと呟く。よくあるバラッド風の物語だが、エリン(Ellin)をアイルランドの寓意と考えることもできよう。

本稿で取り上げた「異国風牧歌」のなかで、『ヒベルニア牧歌集』は古典牧歌の模倣がもっとも顕著に認められる。特にアトキンソンが拠り所としているのは、ウェルギリウスの第一牧歌であり、国の政策のために土地と財産を奪われて流浪せざるを得ないメリボエウスの姿は、英国の支配によって困窮するアイルランドの農民たちと重なり合う。

(6) サウジーの『ボタニー・ベイ牧歌集』

湖畔派詩人の一人ロバート・サウジーはブリストルに生まれ、オックスフォード大学在学中に四篇からなる『ボタニー・ベイ牧歌集』を書いた。(34) ボタニー・ベイはオーストラリア東岸にある湾を指し、ジェイムズ・クックが1770年の第一回太平洋航海の際に命名したもので、その名の由来はヨーロッパで未知の植物が大量に発見されたことによる。(35) この航海に植物学者として随行したジョウゼフ・バンクスは、後にボタニー・ベイを含むニュー・サウス・ウェールズに英国の囚人を送り、植民地の建設に従事させる案を英国議会の委員会に提出した。(36) この案が承認された結果、1787年にはイングランド各地から集められた囚人(男性600人、女性250人)を乗せた最初の船団がオーストラリア(ニュー・ホランド)を目指して出航した。彼らの多くは7年の刑期であったが、14年刑期の者や終身刑の者も含まれていた。(37)

このような背景を持つ『ボタニー・ベイ牧歌集』(1794)の語り手は、全員が何ら

かの罪を犯して英国を追放された流刑囚であり、望郷の思いを募らせながらも、新天地で生きるよりない自らの運命を甘受する。彼らもまたメリボエウスの末裔と言えるだろう。四篇の牧歌にはポーブに倣った時間帯（朝、昼、夕暮れ、夜）が割り振られており、牧歌には珍しくブランク・ヴァースの形式で書かれている。

サウジーは1796年の書簡で『ボタニー・ベイ牧歌集』はおそらく人気が出るだろうと記しており、それなりの自信作であったようだ。(38) 雑誌の批評も悪くない。『アナリティカル・レビュー』は「可哀想なエリノア！彼女は改悛そのものだ！」と叫び、『マンスリー・レビュー』は「主題は完全に新しい」と評して「エリノア」を全文掲載し、『クリティカル・レビュー』も「実に感動的な詩」として「エリノア」を取り上げている。(39)

その第一牧歌「エリノア」は海岸で独白する女性の嘆きである。エリノアは牧師の家に生まれたが、父の教えに反抗して墮落した末に売春婦となり、性病に感染した上に検挙されて流刑に処せられた。彼女は「恥辱の制服」(2行)を着せられ、石灰を作るための貝殻を拾い集める仕事を課せられている。周囲には沼の多い湿原やブライアーの絡み合う森が広がり、畑の土は固いために鋤で崩すこともできず、牛や羊の代わりに鳴くのはカンガルーである。この「世界の最果ての場所」(8行)は「洗練された生活の慰めと罪」(66行)がともに知られていない自然の領域だが、エリノアは男たちの「野獣のような欲望」(75行)から解放され、慎ましい食事と安らかな睡眠を得て、「天にふさわしい改悛した信仰者」(81行)へと変貌を遂げる。

第二牧歌「ハンフリーとウィリアム」は、真昼の陽光を避けて木蔭に入った二人の流刑囚が互いの身の上を語り合う。農夫のウィリアムは妻子と慎ましくも幸福に暮らしていたが、「短気な郷土」(57行)の保護するヤマウズラが小麦畑を荒らすので、これを猟銃で撃ったことを咎められて監獄行きとなった。彼の農場はつぶれ、妻のメアリーは亡くなったが、「彼女の遺体が眠る場所を示す墓石もない」(64行)。

ハンフリーも農夫として働いていたが、聖霊降臨祭に市を見物に出かけたところ、新兵補充に來た軍曹の甘い口車に乗せられて志願兵として入隊する。だが外国での軍隊生活は「飢えて、凍えて、濡れて、足を引きずる」(128行)繰り返して、町で女たちにちやほやされた結果は性病の感染であった。除隊した後も悪い女に命じられるまま盗みに手を染めたが、彼女に裏切られて「裁判で有罪となり、国王は俺を移送した」(143行)。だがハンフリーはボタニー・ベイで安らかに暮らせるのも、王のおかげだと告白する。各雑誌が評するように、どこかユーモラスな雰囲気漂う作品である。

第三牧歌「ジョン、サミュエル、リチャード」は、「水兵強制徴募隊」(10行)に捕まって水夫になったジョンと、新兵補充役の軍曹に酔いつぶされて陸軍に入れられたサミュエルが、自分の不幸や苦労を自慢しあう歌合戦である。リチャード(ディック)は判定役を務め、翌日の夕飯時に出されるグロッグ酒が賭けの賞品だ。ジョンは船酔いに苦しむが、水夫長の命令でマストの天辺に配置されるという荒療治に耐える。海戦では仲間の血で足が滑るなか、敵軍を征服して「船長は金持ちになり、船乗りは酔っ払う」(53行)誉れにあずかる。だが嵐で船が浸水し、ポンプで水をかい出すが、ついに難破して、海岸の灯台を目指して海に飛び込むなどの苦労を重ねた。

一方のサミュエルも一日中行軍して疲れ果てた上に、沼地で体を横たえたために全身が凍え、雨で体が麻痺するという苦難を強いられる。いざ戦闘になると、周囲で弾丸が風を切り、仲間が次々と倒れていくなかで、大砲の砲口から敵を追い立てる。「戦い、征服し、血を流し、一日に六ペンスだ」(45行)という日々を経て、ついに傷病兵となって敵に捕まり、牢に入れられるが、協約によって解放され帰国する。だが欠乏のために「罪と恥辱」(97行)に駆り立てられて流刑となった。最後は古典牧歌の例に倣って、リチャードが引き分けを宣言し、三人はグロッグ酒を飲んで陽気に騒ぐ。

第四牧歌「フレデリック」は夜の森で迷ってさまよう男の独白である。フレデリックは「世間が最初に私を虐待した。私は無情で辛い不正という悪に耐えてきた」(42-4行)が、困窮から何らかの罪を犯し、ボタニー・ベイに送られてきた。彼は「獲物を求めてうろつく飢えた怪物の真夜中の唸り声」(6-7行)に恐怖を感じ、死の眠りは甘美であろうと思いつつも、最後は明かりを認めて、神に「改悛と信仰が我が魂を保証する」(78-9行)ように祈る。コリンズの第二牧歌を思わせる筋書きである。

『ボタニー・ベイ牧歌集』に登場する流刑囚たちの多くは、劣悪な生活環境のために犯罪に走らざるをえなかった者として描かれている。ラシュトンが奴隷貿易の非人間性を糾弾したのと同じように、サウジーも遠国への流刑制度に対して批判の目を向けているように思われる。ただし流刑囚たちの発言には、異国での清貧な暮らしを受け入れているような諦念も感じられ、なかには流されたことを喜んで第二の人生を送ろうとする者さえいる。彼らに同情すべきかどうか疑問が残るところだ。

また四篇の牧歌はいずれも流刑囚の身の上話に終始するばかりで、それも英国やフランスと思われるヨーロッパでの経験が主となっている。オーストラリアの風土や自然を描いた詩行はほとんど見当たらず、ボタニー・ベイという名の由来になった珍しい植物についても言及されない。この牧歌集は一般に「異国風牧歌」に含め

られるが、地域色がきわめて薄いという点で他の作品とは一線を画している。

本稿は十八世紀の英国で書かれた「異国風牧歌」の変遷を辿った。「田園風牧歌」がまったく廃れたわけではないが、詩人たちは古典牧歌の模倣に飽き足らず、新たな題材を求めて異国の風物や慣習を取り入れていった。ただしコリンズの『ペルシア牧歌集』に始まる「東洋風牧歌」は、どれも似たような描写が目につき、すぐに袋小路に入ったように思われる。いきおい詩人たちは別の場所を開拓せざるを得なくなり、本稿では取り上げなかったが、ジョン・スコットの「東洋風牧歌3」は中国を舞台にしており、ジョゼフ・コトルは「マルコフ、シベリア牧歌」を書くに至った。(40)

また英国の植民地政策が進展していくなかで、詩人たちは奴隷制度や流刑制度に対する批判を盛る器として「異国風牧歌」を利用した。ウェルギリウス描くところのメリボエウスが彼らの詩作における手頃なモデルとなり、英国の支配下で虐げられた者が抗議の声を上げるという「政治的牧歌」という様相を呈していく。いずれにせよ、テオクリトスやウェルギリウスを模範とする牧歌の命脈は、十八世紀末でほとんど絶えたということができよう。

注

※本稿では枚数の関係から原詩を省略した。

- (1) William Collins, *Persian Eclogues. Written originally for the Entertainment of the Ladies of Tauris. And now first translated, &c.* (1742, Oxford: Clarendon Press, 1925)
- (2) Thomas Warton, *Five Pastoral Eclogues: The Scenes of which are supposed to lie among the Shepherds, oppress'd by the War in Germany* (London: R. Dodsley, 1745) 拙稿「トマス・ウォートンの『ドイツ牧歌集』」『駿河台大学論叢』41 (2010) 1-19. を参照されたい。
- (3) Richard F. Jones, "Eclogue Types in English Poetry of the Eighteenth Century," *JEGP* 24 (1925) 51.
- (4) 拙稿「十八世紀英国における漁夫牧歌」『駿河台大学論叢』45 (2012) 27-54. および「十八世紀英国における都会風牧歌」『駿河台大学論叢』47 (2013) 81-108. を参照されたい。
- (5) Thomas Salmon, *The Modern History, or the Present State of All Nations,*

- 3rd edition, 3 vols (London: T. Longman et al, 1744)
- (6) *Works*, 1: 641.
- (7) Marion K. Bragg, *The Formal Eclogue in Eighteenth-Century England* (Orono: Maine University Press, 1926) 95.
- (8) E. H. W. Meyerstein, *A Life of Thomas Chatterton* (New York: Charles Scribner's Sons, 1930) 356, 393.
- (9) Wylie Sypher, "Chatterton's African Eclogues and the Deluge," *PMLA* 54 (1939) 246-60.
- (10) Alexander Catcott, *A Treatise on the Deluge*, 2nd ed. (London: E. Allen, 1768)
- (11) Donald S. Taylor, *Thomas Chatterton's Art: Experiments in Imagined History* (New Jersey: Princeton University Press, 1978) 305.
- (12) *London Magazine* 39 (May 1770) 269. 改訂版は *Miscellanies in Prose and Verse by Thomas Chatterton* (London: Fielding and Walker, 1778) 59
- (13) Meyerstein, 393.
- (14) *The British Poets*, 100 vols (Chiswick: C. Whittingham, 1822) 74: 12.
- (15) William Jones, *Poems Consisting Chiefly of Translations from the Asiatick Languages* (Oxford: Clarendon Press, 1772)
- (16) *Critical Review* 33 (1772) 314.
- (17) Alexander Pope, *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, eds. E. Audra & Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 112.
- (18) Sir William Jones, *Selected Poetical and Prose Works*, ed. Michael J. Franklin (Cardiff: University of Wales Press, 1995) 31.
- (19) *The Letters of Sir William Jones*, 2 vols, ed. Garland Cannon (Oxford: Clarendon Press, 1970) 1: 176-7.
- (20) *Letters of Sir William Jones*, 2 vols (London: John Sharpe, 1821) 1: 96.
- (21) William Jones, *Poems Consisting Chiefly of Translations from the Asiatick Languages*, 2nd ed. (London: W. Bowyer & J. Nichols, 1777)
- (22) Alexander Pope, *Epistles to Several Persons (Moral Essays)*, ed. F. W. Bateson (London: Methuen, 1951) 110-2.
- (23) Eyles Irwin, *A Series of Adventures in the Course of a Voyage up the Red-Sea, on the coasts of Arabia and Egypt; and of a Route through the*

- Deserts of Thebais, hitherto unknown to the European Traveller, in the year 1777* (London: J. Dodsley, 1780)
- (24) Eyles Irwin, *Bedukah, or the Self-Devoted. An Indian Pastoral* (London: J. Dodsley, 1776)
- (25) *London Review of English and Foreign Literature* 4 (1776) 398., *Monthly Review* 56 (1776) 158.
- (26) Eyles Irwin, *Eastern Eclogues; Written during a Tour through Arabia, Egypt, and other Parts of Asia and Africa, in the Year 1777* (London: J. Dodsley, 1780)
- (27) *Monthly Review* 62 (1780) 450.
- (28) Edward Rushton, *West-Indian Eclogues* (London: W. Lowndes, 1787)
- (29) James Grainger, *The Sugar Cane* (London: R. & J. Dodsley, 1764) 詳しくは拙著『田園の詩神—十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社, 2005) 230-52. を参照されたい。
- (30) *Poems by Edward Rushton* (London: T. Ostell, 1806) 28-30.
- (31) Hugh Mulligan, *Poems, chiefly on Slavery and Oppression* (London: W. Lowndes, 1788)
- (32) Thomas Atkinson, *Hibernian Eclogues. to which are added Miscellaneous Poems* (Dublin: Printed for the Author, 1791)
- (33) Virgil, *The Eclogues*, trans. Guy Lee (London: Penguin, 1984)
- (34) *Poems by Robert Southey*, 2nd ed. (Bristol: N. Biggs, 1797)
- (35) Patrick O'Brian, *Joseph Banks A Life* (London: Harvill Press, 1997) 129.
- (36) *Joseph Banks A Life*, 214-8.
- (37) *The Voyage of Governor Philips to Botany Bay*, 3rd ed. (London: John Stockdale, 1790) xv, 359-83.
- (38) *The Life and Correspondence of Robert Southey*, ed. Charles Cuthbert Southey (New York: Harper & Brothers, 1855) 94.
- (39) *Analytical Review* 25 (1797) 37., *Monthly Review* ns 22 (1797) 299., *Critical Review* ns 19 (1797) 305.
- (40) John Scott, "Oriental Eclogues III, Li-Po; or The Good Governor: a Chinese Eclogue," *The Poetical Works of John Scott Esq.*, 2nd ed. (London: J. Buckland, 1786) 157-63., Joseph Cottle, "Markoff, A Siberian Eclogue,"

The Annual Anthology, vol. 2 (Bristol: Biggs, 1800) 223-9.

本研究は科研費(23520317)の助成を受けたものである。